多良間島におけるツバメの方言名、ヤウカニス・ヨーカニスの由来

渡久山　章（〒903-0804　那覇市首里石嶺町 1-59-6）

はじめに

多良間島でツバメの方言名は、ヤウカニス（仲筋）、ヨーカニス（塩川）である。ツバメは春と秋、北（ニス）風が 8 日間くらい吹く頃、渡ってくるからとのことである。ところが、隣りの石垣島でヨーカニスは、アマサギの方言名である。陰暦 4 月 8 日頃、やはり北風（ニス）が 8 日間くらい吹き荒れる時に渡ってくるからだといわれている。本稿においては、多良間島におけるツバメの方言名は陰暦 4 月 8 日頃吹く風（ヨウカニシ）と関係があるのかを考え、多良間島における方言名の由来について考えることにした。そのため、多良間島以外の宮古の島々におけるツバメの方言名と竹富島や石垣島におけるツバメの方言名も取り上げ、又多良間島と石垣島との関係の深さにもふれた。これらを前置きにして、由来について考えていきたい。

宮古島と周辺離島及び竹富島・石垣島におけるツバメの方言名

伊良部島でツバメはマミナラシャと呼ばれ、豆を実（な）らす者という意味である[注①]。ツバメは豆（小豆）を植える時期（旧歴 2 月頃[1)]）になると、村の人達はよく豆を植えているかどうか、見てきなさいという神様の使いを受けて来て、又豆を収穫する時期（旧歴 8 月頃[1)]）になると、人々は豆をよく収穫しているかどうか見て来なさいという、やはり神様の使いを受けて飛んでくるのだと伝えられている。宮古島の狩俣ではマミヌパナ（豆の花）と呼ばれ、ここでも神様の使いといわれている[2)]。

宮古島とその周りの離島ではどこでもツバメの方言名にマメ（豆）を冠している。例えば宮古島の多くの村では、マミマーラかマミマーリャで、どちらも豆を回って見る者という意味である。池間島は伊良部島と同じでマミナラシャ、大神島ではマミマーリャ、マミヌパナマーレで、来間島は不思議なことに平良や下地を飛び越えて狩俣と同じマミヌパナマサーマ（マサーマはかわいい鳥という意味）と呼んでいる[2)]。

宮古島とその周辺の島々では方言名にマメを冠して呼ばれているツバメが八重山の竹富島ではカジックンヌ・スバッタラーと呼ばれている。スバッタラーはすばしこい[3)]、カジックンは風が吹くという意味で、ツバメは風が吹く時に来るのでそう呼んでいるとのことである。隣りの石垣島では伊原間でカジマッターラー、宮良でカジマッタラーマ、大浜でカジマンダラー、平得でカジフクマタラー、登野城ではカジバッターレーとカジマッターレー、真栄里でカジフキマターラ、大川でカジマッターレー、川平でカジマタレー、カジマッターレーというふうに、多くの村でカジ（風）を冠して呼んでいる[2)]。

ツバメの方言名に関しては、宮古島とその周辺離島が豆由来なら石垣島は風由来といえそうである。

多良間島におけるツバメの方言名

さて、行政上は宮古郡に属しているが、距離の上では宮古島と石垣島の中間にある多良間島でツバメは何と呼ばれているでしょうか？

筆者は多良間島を訪ねる前、1982 年 12 月初め石垣島の多良間集落で、兼元さん（当時 50 才

くらい）から多良間島では仲筋でヤウカニス、塩川でヨーカニスと呼ばれていることは聞いてあった注②、③。そのことの確認と由来を聞くため、その翌日多良間島に渡った。ゲートボールをしている野里さん（塩川在、当時 72 才）に尋ねたら「仲筋はヤウカニス、塩川はヨーカニスと呼んでいるよ。旧歴の 2 月、新暦の 3 月、彼岸の頃来る。その頃北風が 1 週間から 10 日間くらい吹く。その頃渡ってくるのでヨーカニスという。ヒガン（彼岸）ヤウイ（荒天になる）という言葉がある。春と秋の彼岸の頃になると、海が時化るので、漁師達は「海には櫂（かい）も入らない」と言う。ツバメはその頃飛び回る」と話してくれた。

ツバメが飛来する頃の天候については、多良間島におられた下地モツさんの昔話（ツバメとカンタマシャ）にも「ツバメは天の神様に言われて良い天気には出ず、北風が 8 日も続くような悪い天気に出るそうだ[4]」と紹介されている。

多良間島におけるツバメの方言名は、ツバメが飛来する頃に 8 日間北風が吹いて荒れるという、8 日間北風（ヤウカニス・ヨーカニス）に由来しているといえる。

多良間村は宮古郡に属しているのに、ツバメの方言名は風と関係していて、石垣島に近いように思える。

多良間島と石垣島の関係の深さ

それで、多良間島と石垣島の関係について前掲の野里さんに聞いたら「ラジオの天気予報は、宮古島の次は石垣島の予報をする。多良間島の天気は予報されない。多良間の人々はどこを参考にするかというと、石垣島の方を参考にする。天気は西から来るから」とも話してくれた。自然環境の上では多良間島は宮古島よりも石垣島に近いかもしれない。

歴史上も多良間島と石垣島は以前からつながりが深いといわれている。例えば石垣島平久保半島の東岸には「多良間田」と呼ばれて多良間の人達によって稲作がされた跡があるという[5]。

多良間島と石垣島とは、自然環境や歴史上のできごとでも関係があることがわかった。多良間島でツバメの方言名を風との関係で呼んでいるのも納得できそうである。

石垣島でヨーカニスはアマサギのこと

前述したように、筆者は多良間島におけるツバメの方言名の由来は一件落着と思っていた。

ところが、「八重山野鳥の会創立 10 周年記念誌」[6] を開いて、びっくりした。それには、アマサギの方言名として石垣では「ヨーカニス」、波照間では「ヨーガドリ」竹富では「ヤウファニス」が出ている。

多良間島におけるツバメの方言名が石垣島では、アマサギの方言名である。何故でしょうか？

それで、宮古島市史編さん室の佐藤宜子さんに話したら、佐藤さんはいくつかの資料を送ってくれた。

その中で、岩崎卓爾さんは「ヨウカニシ（陰暦 4 月 8 日頃の北風を言ふ）八日続けば・・・」[7] と書き、更に「陰暦 4 月 8 日頃、北の季節風吹き寒波襲ひきて温度降り俗に言う「アカリピラフ（別れ寒さ）」起る。ユドン（梅雨）の季に入りアラナシ（荒波）シク荒れ（シクはアイゴの稚魚のこと）などの荒日あり。」と書き、続けて「アマサキ（方言ヨウカニシ）渡る」と記している[8]。

正木譲さんは「アマサギを石垣方言ではヨウカニスと呼ぶ。ヨウカは八日、ニスは北風のこと。つまり八日北風である。」と書き、続けて「八重山の古文書『星図』には、「陰暦注④の 4 月 7,8 日頃に吹く北風を、俗に『やうかにし』と呼ぶ」という記述がある。陽暦注⑤に直すと、だいたい立夏（5 月 6 日）の頃に当たる。この北風は 1 週

間ぐらい吹き続くことがあるという。立夏の頃に吹く北風がヨウカニスということになる。」と書いている。更に「つまりヨウカニスが野山を吹き渡る頃、袈裟懸けをしたアマサギの群れが南方から飛来するので、石垣島ではアマサギをヨウカニスと呼んだのである。」と続けている[9]。

石垣島でアマサギをヨウカニシ(ヨーカニス)と呼んでいる。その由来は、陰暦 4 月 8 日頃北風が吹く、その時アマサギが渡ってくるからということである。

ここで、地域を広げて陰暦 4 月 8 日頃の北風は、宮古でどのようにとらえられているかを見てみたい。

宮古における陰暦 4 月 8 日頃の北風のとらえ方

これについて親泊宗二さんは平良市史に挙げてある[10]。それには陰暦 4 月の項に「この月に俗に言う『別れビシサ』(別れ寒さ) が訪れることがある。4 月 8 日頃、北風と共に渡って来る鳥を『アマサギ』といい、この風を『八日北』（ようかにし）と言っている」とある[10]。

筆者は 1987 年伊良部島字仲地の池間方應さん (当時 76 才) からも白サギをヨーハニスと呼んでいた、という話を聞いたことがある。池間さんは「ココオのスツ（穀雨の節、新暦では 4 月 21 日頃）に白サギが来た。それを字伊良部（字仲地の隣り村）ではヨーハニスという。立夏の前にナマピゴロピゴロ(少し寒々)とする。その時に白サギは来る。人頭税の頃、首里に税を持って行き、ココオのスツに風が吹いたら 7～8 日間戻れない。その後帰ってみたら白サギが来ていた。それでヨーハニスという、と聞いている。」と話してくれた。「白サギは普通はスソ（白）サズと呼んでいるが、ヨーハニスとも呼んでいた。」とも加えられた。

なお、正木さんの著書では立夏、池間さんの話では穀雨なので、時期的に少しのずれはあるが、近い時期である。

以上述べたように、陰暦 4 月 8 日頃吹く北風をヨウカニシ、ようかにし、ということは八重山から宮古まで広く使われていたことがわかる。しかもその頃飛んでくるアマサギを石垣島ではヨウカニス、伊良部島ではヨーハニスと呼んでいたこともわかる。アマサギの方言名ヨウカニス（ヨーハニス）も八重山から宮古まで広く使われていたのではないかと思われる。

石垣島におけるアマサギの方言名ヨウカニシのヨウカが含んでいること

ここで、上に挙げた小見出しについて、考えてみたい。なぜかというと、多良間島におけるツバメの方言名ヤウカニス（ヨーカニス）のヤウカ（ヨーカ）は、前項で述べたように、北風が八日間程吹き荒れるという八日間（ヤウカ、ヨーカ）に由来しているのに対して、石垣島におけるアマサギの方言名ヤウカニスのヤウカは陰暦 4 月 8 日の 8 日(ヤウカ)に基づいていて、同じヤウカが含んでいる意味は異なると思えるからである。

ところで、陰暦 4 月 8 日頃の北風について岩崎さんは「ヨウカニシ八日続けば・・・」と書いてあるし、正木さんは前述[9]したように「この北風は一週間くらい吹き続けることがあるという。」と書いている。

これら岩崎さんと正木さんの記述から陰暦 4 月 8 日頃の北風もほぼ八日間吹き続くことがあることも分かる。アマサギの方言名ヨウカニスのヨウカには八日間のヨウカも含まれているように思える。

すると、多良間島におけるツバメの方言名は陰暦 4 月 8 日のヤウカニシ（ヨーカニス）とどんな関わりがあるかを知りたくなる。以下、そのことにふれたい。

多良間島のツバメの方言名と陰暦 4 月 8 日頃のヨウカニシとの関わり

そのためには、「陰暦 4 月 8 日頃、ツバメは多良間島に飛来するか？」を知らなければならない。

それで、鳥類研究者の久貝勝盛さん（宮古島在、1942 年生）に聞くことにした。すると、久貝さんは「穀雨の頃（4 月 20 日から 5 月 5 日頃）にアマサギやツバメが渡ってくる」と話された。久貝さんの観察から、ツバメは穀雨の節にも渡ってくることがわかった。続けて久貝さんは「この時のツバメは主にリュウキュウツバメであるが、ツバメも混じっている」とのことであった（2020 年私信）。

さらに沖縄野鳥研究会によると、沖縄でツバメが見られる時期として、3 月～5 月と秋は 9 月から 10 月としている [11)]。

それから多良間村古歌謡収録制作委員会は「鳥たち」の古歌謡の中に「ようかにす（つばめ）」をとり上げ、解説の中で「旧 2 月から 4 月、9 月いっぱい年 2 回の渡り鳥である。」と記している [12)]。

ツバメ（リュウキュウツバメも含む）[注⑥]は、陰暦 4 月 8 日頃北風吹く時、多良間島に渡ってくるのは確かといえる。

すると多良間島におけるツバメのあと 1 つの由来としては、陰歴 4 月 8 日頃 8 日間に渡って吹く北風のこともあげられそうである。

結語：多良間島におけるヤウカニス、ヨーカニスの由来

春と秋の渡りの時期、八日間（ヤウカ、ヨーカ）程強い北風（ニス）が吹き荒れる頃にツバメはやってくる。それが方言名の由来であり、一件落着と思っていたのが、陰暦 4 月 8 日頃の北風もあと 1 つの由来といえそうである。

これら二つの由来のうち、どちらが始まりなのかは未だ確定できない。ただ、陰暦 4 月 8 日頃の北風は、八重山から宮古まで広範囲に渡って「ヨウカニシ」、と呼ばれていたとは思われる。そのため、陰暦 4 月 8 日頃に渡ってくるツバメをヤウカニス（ヨーカニス）と呼んで、それを春と秋に渡ってくるツバメにも冠したのか？とも考えられるが、明らかではない。ツバメが渡ってくる時期の主体は、旧 2 月頃と旧 8 月頃の八日間強い北風が吹く時だからである。2 つの由来のうちどちらが先なのかは、今後の研究に待ちたい。

謝辞

宮古島市史編さん室の佐藤宜子さんは貴重な資料を付箋紙付けて送って下さいました。これらがなければ、本稿を起こすことはできなかった。30 年以上も前になりますが、兼元さん、野里さんは、多良間島におけるツバメの方言名やその由来を教えてくださいました。伊良部島の池間さんは穀雨の節、白サギが飛来してくることなどを教えてくださいました。久貝勝盛さんは、穀雨の節にアマサギと共にツバメが渡ってくること、さらに下地モツさんが話された民話の在所を教えてくださいました。本永清さん、宮川耕次さんは原稿を読まれ、貴重なコメントをくださいました。多くの著書も参考にさせていただきました。以上の方々と著者の方々に厚くお礼申し上げます。

注

注①　富浜定吉、2013、「まみならしゃ」『伊良部方言辞典』、には「豆を生（な）らすものの意」とある。沖縄タイムス社、679 頁

注②　下地加代子、2017、「ヨーカニス」『つかえる　たらまふつ辞典―多良間方言基礎語彙―』には多良間島の方言として「ヨーカニスが挙げられ、ヨーカニシとも言う」と

ある。多良間村教育委員会、370 頁

注③　多良間村、1973、「わらべ歌」『村誌　たらま島　孤島の民俗と歴史』には「ようかにす」が挙げられている。494 頁

注④　正木は旧歴と書いているが、本稿では岩崎にならって、陰暦と書くことにする。

注⑤　正木は新暦と書いているが、陰暦との対応で本稿では陽暦と書くことにする。

注⑥　本稿ではリュウキュウツバメとツバメの区別はしてない。

参考文献

1）謝敷正市、2015、「10.宮古で作っていた豆類」『ユナンダキズマ　むかしの暮らし』(監修：本永清)、宮古島市教育委員会、36 頁

2) 渡久山章、2011、「ツバメの方言名とその由来、及び各地におけるツバメ観―宮古からの出発―」『宮古の自然と文化、第 3 集』、宮古の自然と文化を考える会、124―142 頁

3) 前新透、2011、「スバッタラー」『竹富方言辞典』、南山舎、311、571 頁

4）宮古民話の会、1989、「下地モツさんの昔話、ツバメとカンタマシャ」『宮古民話の会、第 5 集、ゆがたい』、宮古民話の会、139―141 頁-

5) 牧野清、1983、「多良間田」『沖縄大百科事典(中)』、沖縄タイムス社、732 頁

6) 八重山野鳥の会、1983、「八重山の野鳥方言名」『八重山野鳥の会創立 10 周年記念誌』、68 頁

7）岩崎卓爾、1974、「石垣島気候編」『岩崎卓爾 1 巻全集』、伝統と現代社、298 頁

8) 岩崎卓爾、1974、「新選八重山月令」　前掲書、328 頁

9) 正木譲、2020、「24　八日北風」『島の歳時記』、南山舎、62 頁

10) 親泊宗二、1987、「第 1 章概況」『平良市史　第 7 巻　資料編 5　民俗　歌謡』(平良市史編さん委員会編集)、平良市教育委員会、7 頁

11）沖縄野鳥研究会、2002、「ツバメ」『沖縄の野鳥』、株式会社　新報出版、211 頁

12）多良間村古歌謡収録制作委員会、1997、「鳥たち、ようかにす（つばめ）」『島のむかし歌』、多良間村、103 頁